

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名

加藤弘二郎

インド大乘仏教の二大学派の一つに瑜伽行唯識学派がある。本論文が考察の対象とする『解深密経』^{げじんみつぎょう}は、同派が直接の拠り所とした最初期の経典である。その名称は、空や無自性（固有の本質をもたないこと）を説く『般若経』の隠された意図（密意）を解明するという同経の目的を反映している。サンスクリット本は未発見のため、本論文はチベット語訳と漢訳に伝承される『解深密経』を対象とし、とくに他の経典の例と大きく異なり、チベット語訳の写本・版本間に東西の両系統で大きな内容上の隔たりがある事実に着目し、第7章（無自性相品）の分析考察を通して、その相違の実態と背景を詳論する。

従来の研究は、ほぼ一様に東系統の版本に依拠し、テキスト上の問題の多くが未解明なままに残されてきた。近年になって僅かながら敦煌写本を扱う研究が見られるようになったが、貴重な異読を伝える西系統の写本を基礎に据える研究は皆無であった。その意味でも、本研究は『解深密経』研究史において画期的な意味をもつ。

序論において『解深密経』の概略、写本・版本および校訂テキスト、研究の課題と方法を説明したのち、本論では、(1) 西（テンパンマ）系写本における異読の重要性、(2) 「言説薫習心」をめぐるテキスト解釈、および(3) 「四種類の有情」の記述に関するテキスト解釈の3つのテーマを通して、西系統の4写本が伝える異読の重要性を丹念に検証する。いずれも説得力のある論述で、『解深密経』のチベット語訳本に関するかぎり、今後は西系統の写本を顧みずに研究は成り立たないことを立証した。付篇として、同経第七章の東西両系統のチベット語訳、および敦煌出土チベット語写本の対照テキストを提示し、併せて菩提流支および玄奘による漢訳2本を対照させ、その上で詳細な訳注を置く。

本論文は、(1) 西系統の諸写本には、第7章にかぎっても、文脈から判断して適切と判断される異読が複数の箇所に見られることを指摘し、これと関連して(2) 『解深密経』のチベット語訳本に関しては、東西両系統の写本・版本および敦煌写本の三者を対照させた校訂本の作成ならびに読解が重要であることを立証している。また、(3) 近年研究が盛んなチベット語大蔵経・カンジュル（「仏説の翻訳」部）の系統研究に関しても、新知見を提供している。すなわち、従来の研究はデルゲ、ラサ、ナルタンの3版本の位置づけをめぐる見解を異にしていたが、本研究は、『解深密経』に関するかぎり、これらの3版本いずれも東系統に分類されうるという興味ぶかい事実を明らかにした。

以上のように、本研究がもたらした実証的な成果のもつ意味は大きく、今後の初期瑜伽行派の思想形成に関する研究、とくに『解深密経』研究に新たな視点と方法を提示したという点で、本論文はきわめて意義のある業績として評価することができる。一部にやや明快さを欠く論述は見られるが、本研究の画期的な意義を損なうものではない。

以上の理由により、審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するに値する業績であると判断する。

